



中 等 部

科 目	宗 乘	餘 乘	修 身	國 語	漢 文	英 語	數 學	歷 史	地 理	博 物	圖 書	法 制 經 濟	合 體 計
第一學年	祖 傳	佛 文 集 傳	修 身	講 讀 文 字	漢 文 讀 文 字	譯 文 法 讀	習 作 文 法 讀	算 術	日 本 本 術	日 本 本 術	植 物 本 術	自 在 書	體 操
時 每 週	三	一 二	一	一 一	三	一 一	四	三	一 一	二 二	一 一	三	一
第二學年	宗 學 綱 要	宗 門 史	佛 教 觀 綱 本	全	全	全	全	全	全	代 數	外 國 數	動 物	全
時 每 週	二 二	一 一	一	一 一	三	二	三	三	二	三	二	一	三
第三學年	題 目 鈔	弘 經 要 義	全 史 綱 要	全	全	全	全	全	全	代 數 幾 何	東 洋	生 理	全
時 每 週	二 二	一 一	一	一 一	二	一	一	一	一	三	二	二	三
第四學年	安 國 論	本 尊 畧 辨	法 華 論 貫	草 山 要 路	全	全	全	全	全	全	西 洋	地 理 文 學	用 器 書
時 每 週	三 二	一 一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
第五學年	撰 時 鈔	祖 書 綱 要	歸 宗 論	集 佛 教 論 註 史	佛 教 概 論	日 本 佛 教 史	全	全	全	全	西 洋 日 本	博 物 通 論	法 制 經 濟
時 每 週	二 四	二	二	二	二	二	三	三	三	三	二	二	三

校友會通信

花の朝、月の夕忘れ難きは我が母校の事であり、共に巢立つた校友の事である。年を経るに従つて、懐しさを増すは若き日の思出である、大檀林が閉鎖され、小檀林と併合し、祖山學院の名の下に復活してから已に廿年に垂んとしてゐる。烏智良上人の牡丹餅の講義、納骨堂、釋迦堂、扱ては鶯谷寮の一個に於いて、關本恩師、龜口、遠藤、吉田等々の諸先生の講義を聞き、輪講に冷汗を覺へたのも、遂昨日の如くに思つてゐる間に、一昔前の思出となつてしまつた。富木教頭の温顔世を去つて數年になる。

此間、故武田宣明師の振はれた祖山學院の門標を見返りつゝ、巢立つて行つた我等の校友の胸に通ふものの中靈山身延に於ける學窓生活より懐しきものはあるまい。學窓を離れて、深刻なる社會苦に遭遇せる時思ひ出づるは校友の動靜である。

此の校友の動靜を互に知り合ひ、母校を中心として結束し、祖山教學の隆盛を期し、相互協力の實を期すべく生れ出た者が、我が祖山學院校友會である。

泉義敬君在山當時發企發會し、現在學院に松木、結城、野崎、赤松あり、本山に望月、小林、内野あり、支院の樋口、遠藤、芦川等と相議し、會の基礎確立に努力してゐる。更に校友は、滿州、樺太、朝鮮、上海、北海道等を初め、全國に散在して畢

生の活動を續けてゐる。近く團體を引率して來延せるものに、靜岡縣の松下貞雄君あり、山梨の矢崎顯靜君がある。靜岡の望月宗康君も十月二日布教講習會の爲に來山した。更に最近左記兩君が轉住普山式を擧げた。

川口智隨君 熊本縣川尻町法宣寺へ

泉 義敬君 長野縣高遠町在蓮華寺へ

尙本年春巢立つた校友中、吉川啓善君は大阪の妙顯寺別院に、遠藤本勵君は會津若松市大法寺に、塩島顯活君は札幌經王寺に、渡邊正教君は福岡市の師房に、山脇麗剛君は長崎の檀林に各活動を續けてゐる。是等校友が、棲神寶窟に會して懷舊談に花を咲かす時が何れは來るであらう事を期待して止まない。

此の稿を書き終りし、十月廿四日校友井上龍將、渡邊泰深兩兄は九州より、長谷川泰鑑君は吳より、三人相携へて登山、學校を參觀して、母校の進運を喜びつゝ、中山入行の爲東上した事を誌して擱筆する。

(松木愚堂記)

## 本學寄宿舎創設報告

朝に思親閣の靈峰を仰では聖徳の偉大を偲び、自然に口づさむもの、夫は抑も何か、開目鈔の一節なる「孝とは高なり天高けれども孝よりは高からず云々」の文。夕に御草庵の深裏より流れ来る神水に滴つては、乃往「露深き草を分けて深谷に下りて芹をつみ、山河の流れも早き岩瀬に菜をすゝぎ、袂しほれて干わぶる云々」(身延山御書)の御聖訓に袖をしぼり、常に法悦に浴し報恩に送る日の早や暮に數十日。「同じ曉季の世に生れしも師に逢はず」と草山の聖元政が嘆ぜし詩を思ひ出し、今更本化の上首に面奉の契はざりし自が罪業を省みると同時に、大聖の御膝下に在る我等同胞の未だ過去善業の絶えざる爲か。と又喜悅に堪えぬ。同じ思ひの吾等同胞三十三名は西溪の昔ながらの清流に面して建てられた寄宿舎に此の九月一日より自治と言ふモットーの許に大サークルを造り、吾祖の「行學二道を勵み候べし行學絶えなば佛法はあるべからず云々」(諸法實相抄)を遵奉し専念に其の行に、其の學に精進しつゝあり。

我等舎生は舎監に本院特命の學院教授丸山顛孝師全松田壽孝氏の二名を戴き、學生中よりは更に本院任命の許に舎長吉田孝秀君、副舎長水川雅門君の兩君を其主席として、三十三名の學生は舎則及細則に違反なく今日に及ぶ。舎の細則中毎日實行せるは起床午前四時四十五分、朝勤同六時(勤行後舎監に朝の挨拶)

朝食同七時、靜肅時間午前九時より同十一時迄、正午素食午後二時より同四時迄靜肅時間、同五時夕食、同七時より九時迄靜肅時間九時(舎監に夜の挨拶)同十時睡眠とす。學生室は九室あり、各室に室長一名づゝ置き相互の融和を計る。通常八疊の間に三名平均とし、外に舎監室一棟、炊事夫室一棟、而して食堂一棟あり。

創立已來幾干もならざる爲、浴場及び佛間等諸機關の未だ調はずりし事は殘念となす所なるも、近々舎生の努力と本院の援助に依りて、逐次改良に改良を加へつゝあれば、不日完備する魄を見ん。殊に熱心なる信徒の内に於ては最近舎へ御援助下されし篤志の人を見る。

最初入舎せし吾等は眞劍なる態度を持つて、而も凡ゆる犠牲を拂ひつゝ來りしも、今後舎の前途の爲一名の墮落者も無く異体同心して進展を計らん事を舎生一同と共に誓はん。

現在の寄宿舎を見るに至る迄には其間先輩諸兄等幾多の人々の御後援は言を待たざるも、就中現身延山々務監督冷泉要淳僧正の絶大なる御盡力に依り及び丸山顛孝教授の自己を忘れて御奮闘の賜にして生等の深く感謝する所なり。

宗祖の御聖徳の日に増して輝くご同時に、吾等がさゝやかなる寄宿舎も日と共に隆盛となり後日宗門を背つて立つべき若黨の、舎内より二陣三陣引續き輩出せん事を希望して脱稿す。